

「寒い、ファンレターが」

2020年8月2日

水中ウォーキング教室 大西 紀夫

スポーツクラブNAPでの私の手記に思わず嬉しいレターを戴いた。水中ウォーキングでも私は水曜日。レターの人（金子茂規さん）は金曜日であり、全く顔も知らない人からである。勿論、私の手記をいいなと思い仲介して下さいしたのは、インストラクターの松本真佐美さんである。松本さんも同じ水中ウォーキングの仲間からレターが来たことで、“私も嬉しいです”と手紙の封筒の表に書いてくださった。私は松本さんの書かれた美しい女性らしい文字にも感嘆すると同時に、このレターをファンレターと表現してあったことも心から嬉しくなった。ファンレターとは少し恥ずかしいなー。

金子さんから戴いた文書は7行であったが、言い伝えたい事が総て込められていた。その1行に「感性とそれを文書にする表現力・文才には感服しております」という内容であり、何か自分が誉められすぎたと思うと同時に、やはり誉められれば心から嬉しくなるものだなーとワクワクすることしきり。

ここで何故、私が文章を書くようになったのか書きたくなった。実は、昔は余り書くことが好きではなかった。しかし、仕事で稟議書（りんぎしょ）を書くようになり、必然的に文章を丹念に、丁寧に書く事に気を配ることになった。ここで相当鍛えられた。ただ、この文章は専門語の多い難解な文章であったと思う。次に人の前で話す機会が多くなり、それなりの原稿を用意するようになる。ある日、東大卒の上部団体の人が来て講演され、その原稿を拝見する機会があった。言いたいことが理路整然と書かれており、そして講演では、この文章を元に話し言葉で正確に話しておられ、非常に感銘を受けた。やはり文章は相手の心に伝わるものでなければいけないと痛感したものである。このあと、ある組織の責任者になり、その組織が発行する月刊誌の編集後記を書くことになったが、何時の間にか月刊誌の巻頭の言葉を書くことになった。それ以降、私の感性で6年間、毎月文章を書き続けた。途中から小説を読むことが好きであった亡き妻が添削することで、又、1段と読み易く、わかり易い文章になっていった。毎月、読んでもらうために視点を変えて書くことは大変であった。しかし、職場の仲間からは良く毎月、変わったものが書けると言っていたが、その頃から何でも文章になるようになってきた。

“ありのまま、思いのまま、わかり易く”さらに批判と悪口は絶対書かないようにした。このことは、私が文章を書く原点となっている。……15年前のことである……。

何故、今になって求められていないのに文章を書くのか！！長いこと休んでいたのだが、遂に運動する気になり、水中ウォーキングに参加。いろいろの出来ごとが新鮮で、何かその都度、書きたくなったのは事実。松本インストラクターに、少し水中ウォーキングに関連する文章を書きたいとお伝えしたところ、快諾されたことで更に意欲が高まった。これからも感じた事は、わかり易く楽しく文章にしてみたいと思っている。亡き妻の添削はないが、今度は娘の添削に頼りたい。